

## 人の前ではなく 神様の前に生きる

使徒言行録4章32節～5章11節

2021年7月4日

松田 基子 師

神様は何のために、ご自身の愛する独り子を人の子として、この世に遣わし、お与えになったのでしょうか。ヨハネ福音書3章16節には、

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」

とあります。世とはどう言う意味でしょうか。

元々は、宇宙全体を指す言葉ですが、ヨハネ福音書における世とは、注解によりますと、

「サッセという神学者は、世のことを、神によって造られたが、墮落に依って壊れ、神の裁きのもとにあり、イエス・キリストが贖い主として現れた、そのような状態にある全ての創造されたものを指す。」

とっています。

神様は世界を良きものにお造りになり、人間を特に、愛を築く存在にお造りになりました。それにもかかわらず、人間は神様に背き、罪を犯し、神様の裁きの下に置かれてしまいました。そこで御子イエス・キリストは、全人類の罪を一身に、その身に負い、罪を償い、贖うために、身代わりの十字架に架られました。神様はその贖いを受け入れ、人類への罪の赦しが、御子によって与えられる保証に、イエス様を十字架の死から、3日目に復活させられました。

復活されたイエス様は、40日に亘って、弟子達に教えられて後、天に帰られましたが、その時に、ご自身による唯一の救いの道を、全世界に出て行って、宣べ伝える様にと命じ、弟子達を、ご自身の復活の証人として立てられました。神様は、その働きのために、ペンテコステの日に、助け主なる聖霊を天から送って下さいました。聖霊は、イエス・キリストを唯一、真の救い主と証しする共同体となった教会に力を注ぎ、ペトロを初め、使徒達を用いて、数々の奇跡を行わせ、

イエス・キリストが真の救い主であることを実証されました。

神様の願いは、罪に背いた人間が、イエス・キリストを信じて救われ、ご自身の愛の受け取り手となり、最初の関係に回復する事でした。イエス・キリストによる十字架の贖いを信じ、キリストに結ばれる時、神様はその人に、罪の赦しと同時に、ご自身との関係を回復して下さい、その存在を神の国に、登録してくださいました。神様はそのようにして、誕生したキリスト者を用いて、この罪の世界に、神の国を広めて行こうとなさいました。

そのためには、イエス・キリストの福音を伝える事が、キリスト者の一番の使命ですが、それだけがキリスト者の使命ではありません。イエス・キリストの愛に倣い、神様の愛、キリストの愛を世に映し出して、神の国をこの世に広めて行く務めがありました。しかし、生まれてこの方、罪に染まって来た人間に、人間的な努力で、そのような生き方が出来る筈がありません。そこで神様は、キリスト者をイエス・キリストに似た者に造り変えて行くために、聖霊をお遣わしになりました。

聖霊は、父なる神、子なる神と三位一体の神様ですから、神様の御心のままに、キリスト者をイエス・キリストに似た者に造り変えて行く力を持っておられます。

ペトロをはじめ、使徒や弟子達は、聖霊の助けによって、権力者を恐れる事無く、

「十字架に架けられたイエス様は、復活された。このお方こそ、神の御子、メシア、真の救い主である。」

と、大胆に告白しました。また、ペトロを通して、生まれつき足の不自由な人が癒されました。これらの事を通して、多くの人々が、イエス・キリストを信じ、キリスト者となり、教会の交わりが始まりました。聖霊は、教会を神の国のひな形とする為に、教会の群れの中に、キリストの愛の心を抱くように働き掛けられました。

さて、ここで考えたい事は、聖霊が働いて下さるということは、何か魔術的に力が与えられ、愛の業が何の葛藤もなく、出来るということではありません。やはり、それは、自分の心を、どれ程聖霊に明け渡し、聖霊の導きに服従出来るかに掛かっています。また、神様は、聖霊を遣わして働かれますが、その**行動原理は、愛です**。愛とは、強制から生まれるものではありません。**愛は自発性と自由から生まれるものです**。ですから、聖霊がキリスト者に働かれるのは、その原理に従って働かれます。

最初の教会は、その点に於いて、聖霊に従いました。使徒言行録4章32節を見ますと、

「信じた人々の群れは、心も思いも一つにし、一人として、持ち物を自分のものだと言う者はなく、全てを共有していた。」とあり、そこには、神の国を彷彿とさせる情景が浮かんできます。何よりも、心も思いも、キリストにあって一つ、キリストに結ばれていることから来る、一体感がありました。

そこから生まれる共有感は、自発的でした。教会の中にみなぎるキリストの愛は、使徒達を力づけ、大胆にしました。33節に、

「使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。」

とあります。愛は溢れ出て行く性質を持っています。ですから、対外的にも、好感を得ることが出来ました。最初の教会が、どんなに愛に満ちていたか、つまり、聖霊に明け渡していたかと言うと、それは、34節に、

「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。」  
というのです。

最初の教会は、エルサレムから出発しました。当時の社会構造は、一握りの富裕層と、大部分は、少ない収入から、ローマと領主、神殿に税を納め、手元に残った僅かなお金で、暮らして行かなければならない、生活困窮層の2極に別れ

た格差社会でした。律法は貧しい人々を助けることを命じていますが、教会は更に進んで、身分も貧富も関係なく、キリストに繋がる兄弟になったのです。土地や家を持っている人は、聖霊による愛に促されて、同信の窮乏(きゅうぼう)に心が痛み、必要以上の土地や家を売って、代金を持ち寄り、使徒達の足もとに置いて、神様に捧げました。

そのようにして集まったお金は、必要に応じて、各々に分配されました。特に、神様に感謝し、キリストを愛し、聖霊に全てを明けわたしたバルナバは、心からこの良き業を行いました。バルナバは、心からこの良き業を行いました。バルナバは、レビ族の人でした。モーセの律法では、神様へ仕えることを使命とし、嗣業として居ましたから、土地の分配に於いて、嗣業の土地は与えられませんでした。けれども後代個人の土地所有が許されたようです。バルナバはレビ人の自覚を持って、神様に仕えることを使命として成長したようです。生まれは地中海東部の島、キプロス島で、本名は、ヨセフと言いました。キプロス島での生育歴は、ヘレニズム文化を身に付けながら、ユダヤ教にも精通した、有能な人物でした。彼はイエス様と弟子達に、最後の晩餐の場を提供し、また、ペンテコステ前の、弟子達の祈りの場であった2階座敷を提供した、マルコ母子の親戚であり、その関係で、イエス様に出合い、信じたとされています。

また、パウロとは、彼の回心前に、ユダヤ人の会堂で顔を合わせていて、パウロの回心に伴い、彼を迫害者として恐れるキリスト者の中にあって、エルサレム教会の使徒達の所へ案内するという、信仰の大胆さも持ち合わせていた、立派な人でした。彼はその人柄から、バルナバ、その意味は、慰めの子と呼ばれていました。彼は、エルサレムに遺産の土地を持っていたようです。彼は喜んで、その畑を売って、その代金を、そっくりそのまま、使徒達の足もとに置いたのです。つまり、献金をしました。

その事は、同信の友を感動させました。その

ような感動は、伝染するものです。

『わたしも、十分に祝されているから、あの土地を売って捧げたい。神様どうかお用い下さい。』

と、捧げる人が何人も起こったのです。そういう人々が称賛されると、その声を、

『あなたも、あちらにもこちらにも、土地を持って居るけれども、あなたは何時捧げるの。』

と言う風に、受け取る人がいます。自分がどう思われるか、何時もその事が気になる人がいます。人間は、周りの評価で自分の価値を持つとする、生来の性質を持っています。キリスト者になっても、イエス様から目を離し、聖霊を心から追い出し、自分自身が、心に座ると、すぐに、この世の考えに逆戻りしてしまいます。

そんな心に逆戻りした夫婦がいました。

5章1節を見ますと、

「アナニアと言う男は、妻のサフィラと相談して土地を売り、妻も承知の上で、代金をごまかし、その一部を持って来て、使徒達の足もとに置いた。」とあります。

アナニアがこの時、ペトロにどういう説明をして捧げたのかは、書いてありませんが、アナニアはそれが土地売却の全額であると装ったのでした。その事に対して、ペトロはアナニアを厳しく叱責しています。3節に、

「すると、ペトロは言った。

『アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。』と。

サタンと言うのは、試みる者。

誘惑者という意味を持っています。

アナニアは神様から目を離したことによって、聖霊を心から追い出し、自我が心を占めると、サタンは、彼の我欲をくすぐり、

『そうしたら良い。誰も見ていない。

ごまかしたって誰にも分からない。』

『そんなに沢山することはないよ。

そんなに捧げて、後で困ったら

どうするのかい。』

『そんな事にならないように、

取って置いたら良い。』

『でも、そんな事を言ったなら、皆から何だ、全部ではないのかと言われるに

決まっているから、捧げる時は、

全てをお捧げしますと言ったらよい。』

と、ささやくのです。

アナニアは最早、聖霊に依る判断が出来なくなり、ただ、人々や使徒達に、

『どう評価されるのか、そのことにしか、心が働きませんでした。』

ペトロはその事を聖霊に依って見抜いた様です。

ペトロにとって、それが、神様に対する献げ物であったことが、問題でした。自分に対するごまかしであるなら、アナニアを諭したでしょう。

しかし、聖霊は、三位一体であられる神様です。それは、父なる神様を欺いたと、同じです。

特に教会が誕生し、聖霊の導きと働きで、切り拓かれていく大切な時でした。

聖霊を欺くことは、最大の罪と考えられていた時でした。ペトロはアナニアを諭しています。

4節に、

「売らないでおけば、あなたの物だったし、また、売っても、その代金は自分の思い通りになったのではないか。あなたは、人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」

と、その罪を指摘しました。ここには献げ物についての、大切な要件が語られています。神様の行動原理は愛です。愛とは自発性です。自発性は、自由から生まれます。神様が求めておられる献げ物は、この要件を満たしていることです。売りにくくなかったら、売らなくて良いのです。売ったとしても

『神様、わたしはこの額を

心から喜んでお捧げします。』と、

心に在るところを喜んでお捧げする事を、神様は求めておられます。

パウロはコリントⅡの9章7節で、

「各自、不承不承ではなく、強制されてでも

なく、こうしようと、心に決めた通りにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。」

と勧めています。

ペトロは、信仰の権威をもって、アナニアに、「あなたは、人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」

と断罪しました。アナニアはこの言葉を聞くと、倒れて、息が絶えてしまいました。若者達が、立ち上がって、アナニアの死体を包み運び出して、葬りに向かいました。そして7節を見ますと、「それから3時間程経って、アナニアの妻がこの出来事を知らずに入って来た。ペトロは彼女に話かけた。

『あなたたちは、あの土地をこれこれの値段で売ったのか。言いなさい。』

彼女は、

『はい、その値段です。』

と言った。ペトロは言った。

『二人で示し合わせて、主の霊を試すとは、何としたことか。みなさい。あなたの夫を葬りに行った人たちが、もう入口まで来ている。今度はあなたを担ぎ出すだろう。』

すると彼女はたちまちペトロの足もとに倒れ、息が絶えた。」

とあります。

私たちはこの記事を読んで、『厳しすぎる』

と思うのですが、神様を欺くと言う事が、それ程赦しがたい、厳しい事なのだと言うことが示されています。夫を葬った若者達が戻って来て、彼女を運び出して、その側に葬ったのでした。11節に、

「教会全体とこれを聞いた人は、皆、非常に恐れた。」

とあります。

私たちも 神様の前にへりくだり、考えるべきです。私たちの命も、財も、全ては神様のものです。私たちは地上を旅して行く間、その使用権を与えられているだけです。しかし、私たちも、すぐにこの事を忘れ、神様を見上げるのではな

く、周りの人を見て、比べ合うのです。生来、握り締めておきたい心は、

『もっと多く集めたら、捧げられるのに、』  
と思ったりします。

そのことについて出エジプト記、16章17節に、マナのことが記されています。

「ある者は多く集め、ある者は少なく集めた。しかし、オメル升で量ってみると、多く集めた者も、余ることなく、少なく集めた者も、足りないことなく、それぞれが必要な分を集めた。」とあります。神様は私たちの必要をご存知で、必要は与えて下さいます。まして、奪い取ろうとなさるお方ではありません。私達は、御子までも賜った、そのご愛に感謝して、唯神様に向かって、心から喜んで、お捧げしたいものです。

全ては主のもの、神様への感謝に溢れて、示されるままに、捧げる喜びに生かされ、神様を見上げ、神様の御前で生きて行く、そのような生き方が教会の中に、神の国を現して行くことになると思います。私たちは、そのような思いで、信仰生活を続けて行こうではありませんか。

お祈りをいたします。

愛と憐れみに満ちた、天の父なる神様、私たちをイエス・キリストの身体である教会の一員として下さり、感謝致します。

教会には、世に神の国を現す使命が与えられています。わたしたちの愛の足りなさをお赦し下さい。

この世の思惑に支配されない様に、常に聖霊を求め、神様の御前で生きる者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。